

特 殊 報

長崎県病害虫防除所長

平成20年度病害虫発生予察 特殊報第1号

- 1 病害虫名 すすかび病
- 2 病原名 *Pseudocercospora fuligena* (Roldan) Deighton
- 3 発生作物 トマト
- 4 発生場所 大村市

- 5 発生確認の経過
平成20年3月、大村市の施設栽培トマト（品種：麗容）において、葉の表面に淡黄褐色の病斑を生じ、葉裏に灰褐色粉状のかびを生ずる株が認められた。病徴は葉かび病に酷似していたが、顕微鏡で確認したところ、葉かび病とは明らかに異なる分生子が認められ、総合農林試験場で確認した結果、本県では未発生のトマトすすかび病であることが判明した。
本病は平成8年に宮崎県で確認されて以降、これまでに1府17県で発生し、特殊報が発表されている。九州においても宮崎県のほか、熊本県、鹿児島県、佐賀県、大分県で報告されている。

- 6 感染植物
トマト以外の植物では確認されていない。

- 7 病徴
葉に発病する。初め葉裏に不明瞭な淡黄緑色の病斑が現れ、やがて灰褐色の粉状のかびを生じる。病斑はしだいに拡大し、円形あるいは葉脈に囲まれた不整形病斑となり、灰褐色～黒褐色に変わる。葉の表面にも裏面よりやや遅れて同様の病斑を生じるが、裏面に比べて少ない。発病は下位から中位葉にとどまり、葉かび病に比べ上位葉への進展は少ない傾向にある。
病斑が葉かび病に酷似しており、肉眼では本病か葉かび病かの見極めが難しい(図1, 2)。

- 8 病原菌の特徴
糸状菌の一種で不完全菌類に属する。生育適温は26～28℃、分生子の形成適温は18～22℃、分生子の発芽適温は26℃前後である。分生子は淡褐色の鞭状または円筒状で、先端は少しくびれ、小型の油胞がある。大きさは様々(13.3～170.3×2.7～5.6μm)で、0～15個の隔壁がある。
なお、葉かび病の分生子は単胞ないし2胞、大きさ14～38×5～9μmで、すすかび病と明らかに異なる(図3, 4)。

- 9 発生生態
被害植物の残渣で越冬し、翌年の伝染源となる。多湿条件下で発病しやすく、密植、過繁茂、換気不十分の施設栽培で発病しやすい。葉かび病は晩秋～春に発病しやすく、肥料切れや草勢の衰えが発生を助長するが、すすかび病は真夏から秋にかけて発生が多く、高温時期や草勢の旺盛なトマトにおいても発生すると考えられている。

10 防除対策

- (1) 多湿条件で発病しやすいので、密植や過繁茂、施設内の換気を行う。
- (2) 発病葉などの残渣は伝染源となるため、施設外に持ち出して適切に処分する。
- (3) 葉かび病耐病性品種に葉かび病の症状が発生している場合、本病の疑いが強いので特に注意する。



図1 トマトすすかび病の病徴



図2 トマト葉かび病の病徴



図3 トマトすすかび病の分生子

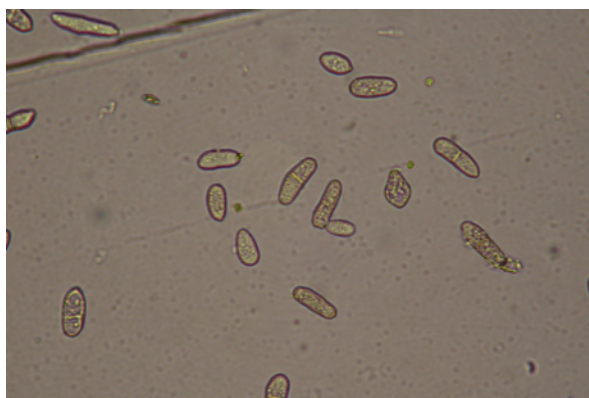


図4 トマト葉かび病の分生子

病害虫防除所の発行する情報の入手は、インターネットをご利用ください。
「防除所ホームページ」 アドレス：<http://www.jppn.ne.jp/nagasaki/>
この情報に関するお問い合わせ
長崎県病害虫防除所 TEL：0957-26-0027